美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

5

2016 May/June

TAKE FREE

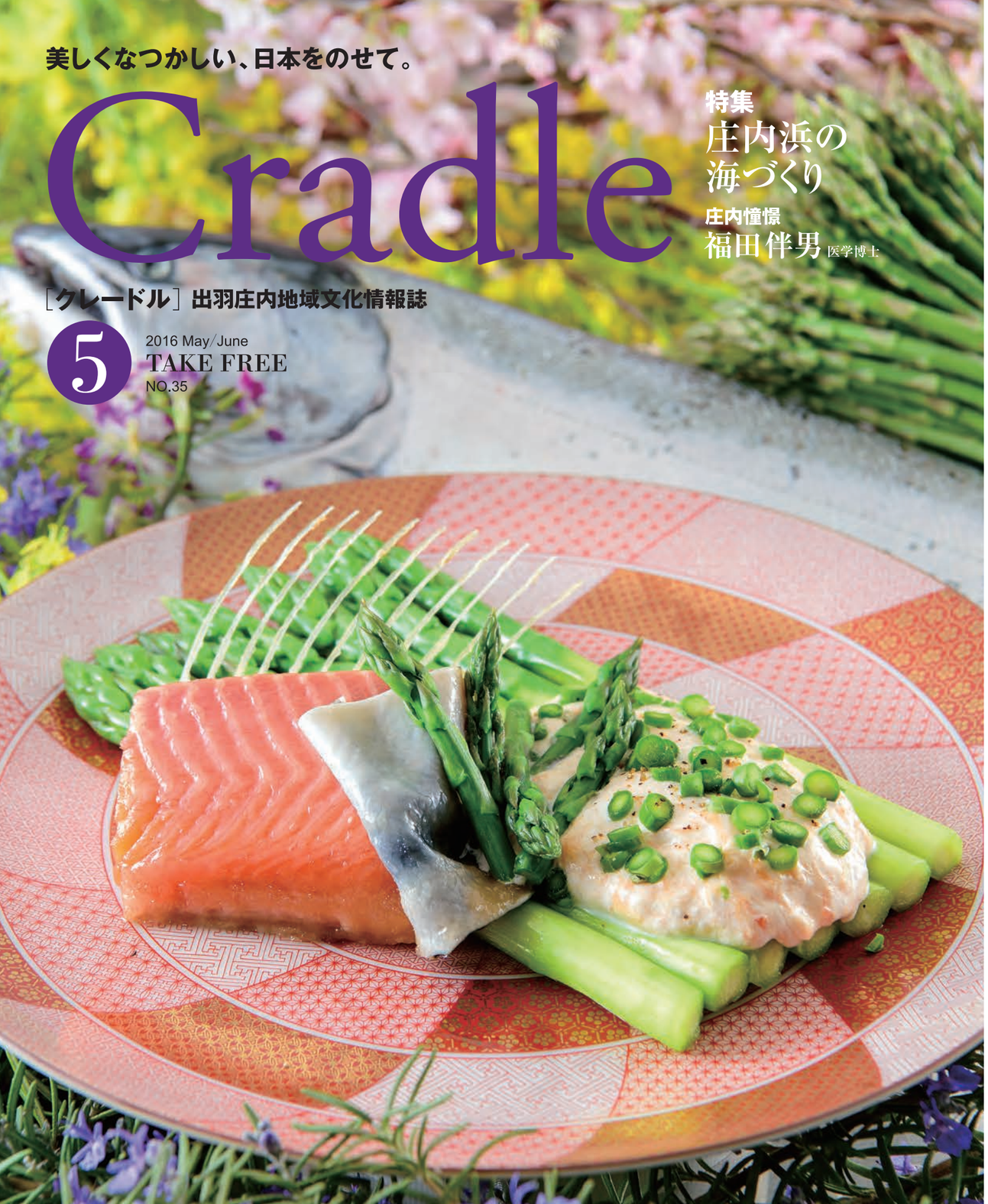
NO.35

特集

庄内浜の海づくり

庄内憧憬

福田伴男 医学博士



Cradle 5 美しくなつかしい、日本をのせて。［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2016 May/June

平成28年5月1日発行（偶月奇数月発行）第6巻5号（通巻35号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15（株式会社 出羽庄内地域デザイン）電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市亀田2-59-3（コマツ・コーポレーション）電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

遊佐町／鳥海山

風柔らかく　水面に映える鳥海山

荘内銀行

釣りは心のふる里

福田 伴男

お気に入りの鳥海山のふところ深くに抱かれて、
渓流の岩や崖をよじ登り、激流を渡渉し、
源流へ分け入ってゆく。釣っては放す釣りの旅。

山形県随一の落差を誇る美しい名瀑「玉簾の滝」。その滝を飲みこむようにして流れ下る前ノ川での「鳥海山やわた前ノ川釣り大会」が、今年で15回目を迎える。

鳥海山荘での前夜祭も楽しいが、翌日の渓流釣りもまた楽しい一日である。東北六県はもとより、関東以北の渓流釣り師たちが酒田へ、升田の滝の里ふれあい館前のグラウンドへ続々と集結する。その光景は圧巻、武者絵巻を見ているようである。

広大な庄内平野の中にポッカリとただ黙ってそびえ立っている鳥海山。波の花が乱れ飛ぶ冬の日本海も大好きな風景だが、この酒田周辺にはまだまだ足繁く通う、幾度でも行ってみたいと思う魅惑的な場所がたくさんある。

ぼくが少年時代に憧れていた偉人に、医学者の野口英世と不世出の写真家、土門拳がいる。最上川南岸の飯森山地区の「土門拳記念館」の作品たちには、何度行っても感激させられる。

その近くの「酒田市美術館」もそう、酒田出身の彫刻家高橋剛の踊り子像など、数多くの素敵な作品が展示されている。剛さんとは30年も昔、アラスカへ二度もサケ釣りの旅をした。思い出深い、なつかしい人である。

土門拳記念館の近くに、東北銘醸の「初孫酒造資料館」があるが、下戸のぼくでも時々訪ねる魅力ある酒蔵だ。〝砂潟 海鳴り〟がとてもうまい。

患者さんに幾度となく問われる。「先生は山形のご出身ですか？どうしてそんなに鳥海山が好きなんですか？」と。そういえばぼくの診察室にも処置室にも、鳥海山の写真が大きな顔をしてでんと飾られている。

春夏秋冬、特に釣りシーズンとなると、月に二度三度、片道600キロを四輪駆動車を走らせて月山を抜け、鶴岡を通過して庄内酒田へまっしぐら。振り返ればもう40年の年月を越してしまった。

お気に入りの鳥海山のふところ深くに抱かれて、ただ黙々と、岩石累々と積み重なった渓流の岩や崖をよじ登り、激流を渡渉し、源流へ分け入ってゆく。難行苦行の連続と、釣っては放す釣りの旅…。時々仕掛けを流芯に流しながら、ふと思う。「どうしてこんな危険と背中合わせの厳しい岩魚釣りをしているのだろうか」と。コツコツと魚信が竿尻に来るたびに、我を忘れて会心の合わせをする。竿はしなやかに弧を描いてふるえている。その繰り返しである。

日向川の水源、鳥海山「女郎沢」での岩魚釣り。
渓流釣りの極意“石化け”の術で、静謐な自然に溶け込む奥様の真子さん。

ふくだ・ともお／福田医院院長、医学博士。1937年生まれ、大分県出身。昭和大学医学部・同大学院生化学科を卒業。都立荏原病院小児科、東横病院胃腸科を経て、1967年に神奈川県横浜市で開業。ラジオやテレビ、雑誌やスポーツ紙などで釣りや医療についてのコメントを多数執筆。趣味は書道、絵画、カメラ、釣り、登山、随筆など。その1つのカラオケは、歌手のディック・ミネ直伝の十八番を持ち、持ち歌に「海鳴りの宿」「夢追いきずな」がある（通信カラオケでも配信）。横浜カラオケ研修会会長。㈱上州屋顧問。鳥海2236ゆさ親善大使。著書に『ドクトル釣行記』（産報出版）、『町医者の知恵袋』（実業之日本社）、『鳥海山に魅せられて』（アヤベ企画）他多数。

森から川が流れ、海へとつながっていくのを見た時、
海は、森と川から四季を託されて、
魚や小さな生き物たちにその息吹を与えるのだと
そんなことを想いながら、庄内の浜辺に立ちました。
命のつながりがある場所に身を置く人たちは、
その尊さを一番よく知っているのかもしれません。

トビラ写真（鼠ヶ関港） ＝ 高橋政知
協力 ＝ 山形県庄内総合支庁産業経済部 全国豊かな海づくり大会推進課、山形県漁業協同組合

庄内浜の海づくり

特集

©高橋政知

特集
庄内浜の海づくり

限られた恵みを
守りながら最大限にいかす。
全国一小さな海と共に生きる
漁業者たちの取り組みを紹介します。

共に生きる決意と団結の海づくり

お話し　西村 盛さん　◎山形県漁業協同組合

全長およそ100㎞。酒田沖に浮かぶ飛島を足しても、山形県の海岸線は全国一短いといわれています。「つまりそれは、漁場の狭さも全国一ということです。そのため、かつては漁業者間での諍いもあったそうですが、自然に収束していったようです。〝自分だけが稼いでも生き残れない〟と誰もが感じられるほど、海の資源が少なかったんでしょうね」と山形県漁業協同組合総務部の指導課長、西村盛さんは話します。

「資源管理の取り組みが、トップダウンではなく漁業者主導で早くから行われてきたのも、資源枯渇への危機感があったからなんだと思います」。その危機感は、協力と調和の意識となって漁業者間に強い連帯感を生み出しました。そして51年前、山形県は全国に先がけて、当時県内に8つあった漁協を統合したのです。

漁具の制限や休漁日の設定など、漁がしにくくなる規則を漁業者は最も嫌うといいます。しかし県内の漁業者はそのような規則をも自らに課してきました。「限られた資源を有効活用するため、獲り方も売り方も、しっかりと高い値が付く方法が徹底されてきました」と西村さん。例えば漁具に関しては、網の目の大きさや太さがすべて決められています。網を上げるときに小さな魚が目を抜けて逃げて行くのが見えるそうですが、それでも規則を破る人はほとんどいません。また、大きな市場が休みになる前日は休漁日にしています。いいものが獲れても、新鮮なうちに市場に出せなければ高値が付かず、貴重な資源を無駄にすることになるからです。「ここまで厳しい規則が浸透しているのは、やっぱり自分たちで決めたからなんですよね。そうでなければ、成立させるのは難しかったでしょう」。

©高橋政知

漁獲量こそ多くありませんが、多種多様なものが獲れるのが山形県の漁業の強み。近年、〝その強みをいかし、もっといいものを出したい〟という意識が、漁業者たちの中で高まりを見せています。「魚食離れもあり、ただ魚を獲ってきても難しいということに皆さん気づきはじめています。何とかして高い付加価値をつけたいと。庄内おばこサワラは、その代表例ですよね」。しかし、全国一ともいわれるその味を生み出す「活〆」と「神経抜き」の技術も、ずっとトップであり続けられるわけではありません。「いい技術が出てくれば周りが追随する、そしてそこから抜け出そうとまた新しい技術が開発される。漁師って負けず嫌いですから」と西村さんは笑みを浮かべます。「皆さんの頑張りに応えるためにも、私たち漁協は少量多品種という特徴をもっといかしてブランディングに力を入れていかないといけませんね」。

より質の高いものを求めることで、資源をうまく管理する。全国一美味しい魚を生み出すための技術は、全国一小さな海で生きてきた漁業者たちの知恵に支えられているのです。

取材・文＝工藤 拓也

（左から）組合長の長谷川保正さん（清丸）、渡部伸二さん（第五多喜丸）、元木進さん（第三興隆丸）。組合員は現在10名。

明石礁鯛浮縄組合

大瀬鯛縄協議会

（左から）本間仁さん（夕仁丸）、本間和憲さん（千修丸）、会長の本間健太郎さん（海皇丸）、鈴木"番長"剛太さん（剛雄丸）。会員は現在22名。

特集
庄内浜の海づくり

庄内浜の水産業を守る海づくり

庄内浜の沖には、明石と大瀬という二つの海底山脈の頂があります。ここは、山形県のトップブランド魚の一つ、「マダイ」などの漁場として大切に守られてきました。

明石、大瀬の漁場では、4月から7月にマダイの漁期を迎えます。ここでは「はえ縄」といって、1本の長い縄に数百本の釣り針をつけた漁法が用いられてきました。この時期のマダイは海の中層にいることから、漁具を底に入れずに浮かせる「浮はえ縄」が主力。はえ縄漁は魚体に傷がつきにくく、鮮度が落ちにくいため、高い市場価値があります。漁業者たちはこの貴重な漁場を生業の場とする一方で、壊さず後世に残そうと、自らに厳しい制約を設け、大切に守り続けてきました。

庄内浜で鯛のはえ縄漁が始まったのは、昭和30年代ごろ。日本の漁業は戦後、沿岸から沖合へ、沖合から遠洋へと規模を拡大し「海に出れば獲れる」時代でした。ほんの数艘から始まった鯛のはえ縄漁もたちまち花形となり、昭和50年代には100艘近くが操業したといいます。「明石も大瀬も、20艘規模の場所に100艘だがらの。早い者勝ちで漁に出たり、設備投資をしたり、みんな莫大な労力とお金をかげだな。これじゃあ商売にならないからって、漁業者同士の規律を持とうってことになったなやの」と話してくれたのは、明石礁鯛浮縄組合の元木進さん。漁師歴50余年の大ベテランです。

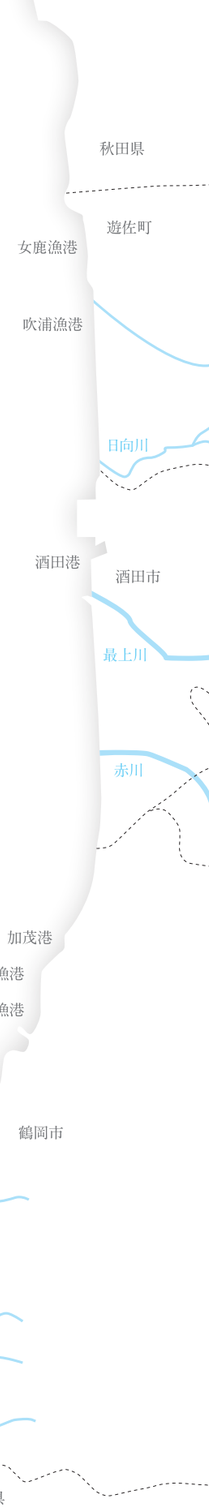
そこでまずは、出漁船の数を抑えるため、船ごとに出漁日を設けました。すると操業上のトラブルは半分に。それでもまだ50艘近くが出漁するため、今度は操業する場所を定めます。温海から鼠ヶ関までの漁業者は大瀬、堅苔沢から吹浦までの漁業者は明石を使い、また最盛期には、はえ縄船が利用できるよう他の漁業者の理解を得ます。さらに、はえ縄漁の漁業者間でのトラブルがないよう輪番制を設けました。『番割』といっての、漁場を等間隔に割って、持ち場を交替制にしたな。出漁の時間も、使う漁具も、海に縄を入れる時間も統一しての」。こうして公平性が築かれ、競争による乱獲を防ぐことにつながりました。「決め事をするにも一筋縄でいかない人ばっかりだがらの（笑）、大きい声を出し合うこともあった。でも我々には避けては通れなかった道。誰かが声に出してきたことで、漁場が守られてきたど思う」。この番割は、山形県独自の取り組みで、漁業者のモラルとして今も受け継がれ、当県は鯛のはえ縄漁の先進地モデルとなりました。

「今は生態系が変わってきて、この先どうなるか誰も分がらね中で、海の自然とどう向き合っていくかが、これからの宿題だろうの」。

地域活動に励む
鼠ヶ関の皆さん

右から富樫令さん（鼠ヶ関漁業者会会長、「第二港丸」船主）、佐藤利光さん（「恵徳丸」船主）、佐藤具視さん（民宿「咲」経営）、飯塚厚司さん（ねずがせき魚の森づくりの会会長）、五十嵐一彦さん（五十嵐米穀店店主、鶴岡市議員）、奥井洋さん（鶴岡市職員）

漁村を元気にする海づくり



庄内一の漁師数を誇る鼠ヶ関は団結力が強く、地域活性への意識も高い漁師のまち。漁業と林業が手を携える「魚の森づくり活動」で、地域の絆はさらに深まりそうです。

山形トップブランドに指定されている紅エビをはじめ、ハタハタやサワラ、ズワイガニ、寒ダラなど、四季を通じてさまざまな魚種があがる鼠ヶ関港。底びき網を中心に、磯見やはえ縄などの漁法も行われており、今年度の「全国豊かな海づくり大会」の海上歓迎・放流行事会場に選ばれています。

この鼠ヶ関地区で「魚の森づくり活動」が始まったのは、平成26年10月。林業専用道「橋掛線」開設記念も含めた記念行事「豊かな森と海づくりinあつみ」での広葉樹植栽が、活動の第一歩となりました。イベント当日は鼠ヶ関小学校児童と各自治会、森林組合に、漁協のほか漁業関係9団体が一堂に会し、植栽のほかにも「クロダイ稚魚の記念放流」や自然教室も兼ねた「山の道トレッキング」、漁師による「エビ汁振舞い」など盛りだくさんの内容を開催しました。「ねずがせき魚の森づくりの会」会長を務める飯塚厚司さんは、「体験した子どもたちは面白がってたよの。それに、林業と漁業の関係者が一緒に活動するのは初めてだから新鮮でした。ここは山を保有している漁師も多いから、森の保全には理解が深いんだろうの」と話します。その後は団体有志が集まって下刈りなどを実施。今後も森林の〝保育〟活動を継続する予定です。「森や海を守り育てることは、何世代にも関わること。すぐに結果が見えるものではないから、全員に理解してもらうには時間がかかるかもの。でもだからこそ、子どものうちから海に親しむ経験を重ねてもらいでなや」。

そう真剣なまなざしで語る飯塚さんは、小型底びき網漁船「三和丸」船長の傍ら、鼠ヶ関地域協議会「蓬莱塾」の幹事長も務め、7月中旬から8月中旬にかけては漁船クルージングを、9月と10月には「とれたて！お魚市」を実施しています。「自分がたが住んでいる町なんだから良くなってもらいたい。それなら面白いことやるかって、俺自身はそういう感じだな（笑）」。

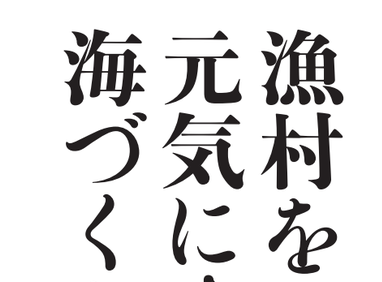
また県の出前講座で内陸地方の小学校に出向き、子どもたちに魚食文化を伝える活動も行っています。「庄内は山のものも海のものも間違いなくうまい。観光で海を眺めるだけじゃなく、触れて親しんでもらえるように工夫しないと」と語る飯塚さんのアイデアは、尽きることがありません。

漁師のまちとして、また地域活性化を図ることで培われてきた鼠ヶ関地区の団結力。今後、「魚の森づくり活動」によって育まれる森と海、それを守り支える人々のつながりが、地域の可能性をより大きく広げてくれることでしょう。

取材・文＝土門 かおり

「うまい庄内の魚を食べ続けてもらうために、もっと魚に触れて親しんでもらいでなや」（飯塚さん）

眼下に海が広がる山地にて魚の森づくり活動。昨年6月には漁業関係者を中心に、植樹後の下刈り作業を実施。



蓬莱塾で毎年開催している鼠ヶ関港「とれたて！お魚市」。鼠ヶ関港で水揚げされた鮮魚の販売のほか疑似セリ体験も楽しめる。

特集
庄内浜の海づくり

特集
庄内浜の海づくり

川から海へとつなぐ海づくり

鳥海山の伏流水が、岩場や砂浜に湧き出す遊佐町の浜辺。山から川、そして海へのつながりが見えるこの場所で汽水域をフィールドにした「海づくり」が進められています。

海面下の砂泥や岩礁に海藻や海草が茂る「藻場（もば）」は、プランクトンや小魚がすみ、それらをエサにする魚たちが集まる〝海の森〟です。ここ遊佐町の海岸では、夏の岩ガキ漁のほか、アワビ漁や県内唯一の小型定置網でのハタハタ漁などが行われ、藻場はその魚や貝の産卵場所となってきました。

しかし近年、海藻が減少し、稚貝や稚魚の生育への悪影響が危ぶまれる状況に。そこで地区の20～50代の漁業者たちが集まって、平成21年に藻場の再生に向けた取り組みがスタート。平成25年には水産庁の「水産多面的機能発揮対策」に採択され、「遊佐町海づくりの会」が発足しました。現在では漁業者だけでなく、周辺の自治会や役場の職員、ダイビングショップの経営者らがメンバーとなって、海岸から河口をフィールドに、川と海が健全に循環するよう、再生・保全活動を行っています。

「具体的には、日向川河口のヨシ（葦）帯の手入れや、真水と海水が混ざる汽水域でシジミの育成を行っています。ヨシには水の浄化作用があります。以前は茅葺屋根や簀（す）に使われていましたが、利用されなくなったために荒れ放題で、ツル性植物や漂着ゴミの溜まり場になってしまいました。シジミは、昭和60年頃まで白木集落で漁をしていましたが、それがなぜいなくなってしまったのかを探っています」。そう語るのは「遊佐町海づくりの会」代表の伊原光臣さん。ヨシ帯の漂着ゴミの清掃では、3年で30トン以上を回集し、成育場を拡大しました。シジミの再生活動では、青森県の小川原湖漁協などの指導を仰ぎながら、3年で延べ1000キロのシジミを放流。いずれは自然繁殖できるよう環境づくりを進めています。

ヨシ（葦）帯の整備や、シジミの育成など河口の環境保全から海の健全化を図っています。

「海の資源は陸上とは違って、なかなか目に見えません。魚が多く獲れたからといって資源が多いとは限らず、どこに何がどれだけいるか、正確な数字は分からない。計り知れないからこそ、効果が目に見えて分かることを中心に取り組んでいます」。この3年で確かな手ごたえを感じながらも、海の環境改善は20～30年がかりにおよぶことも見越している伊原さん。

「漁業者以外にも、町の若い人たちやクロマツ保全活動の人たちなどを巻き込んで、次世代につなげたいですね」。真水と海水が混ざることで豊かな生態系が育まれる汽水域のように、多様な人々が混ざり合うことでこの「海づくり」の活動が、さらなる広がりを見せてくれることを期待しています。

取材・文＝松本 典子

©佐藤一道

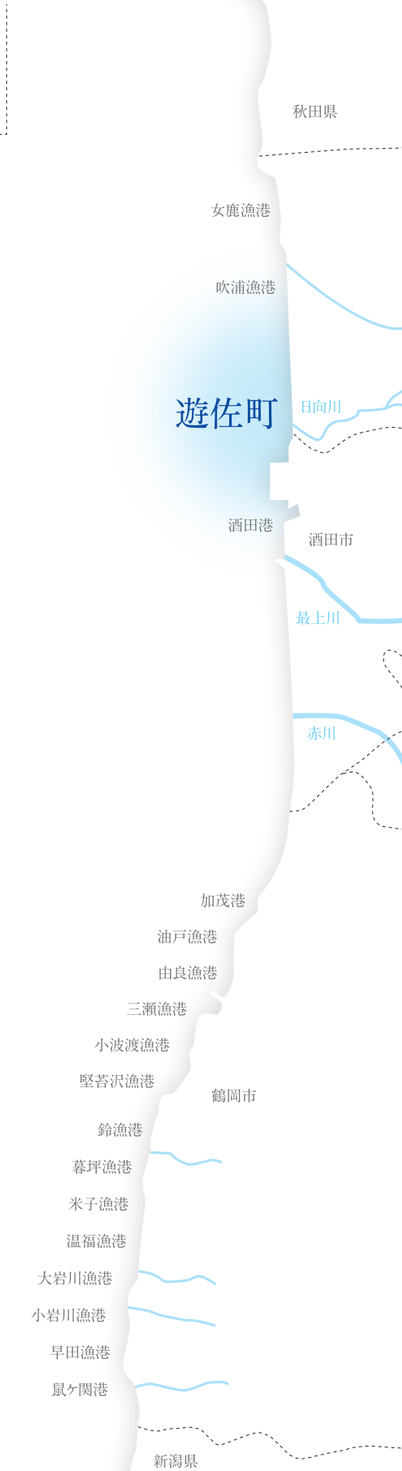
海藻がなくなった岩場に、母藻となる装備を設置。
海藻から卵が落ちて岩に根づく。

©佐藤一道

3年の活動期間で藻が着実に増殖、ハタハタが再び産卵に訪れるように。写真は藻についた卵塊。

（左から）栄田俊輔さん（廣栄丸）、高橋正博さん（北斗丸）、伊原勇さん（勇漁丸）、伊原光臣さん（光平丸）、土門拓也さん（栄祥丸）、本間敏勝さん（白木自治会）、佐藤一道さん（㈱セカンドリーフ）。現在、会員は37名。※平成28年3月現在

遊佐町海づくりの会



庄内写真季行 27

鶴岡市・由良海岸

空が青と赤に分かれる頃、入り江でシャッターを切り始める。色彩は太陽からの賜り物。

風薫るとある日、美しい砂浜と朱塗りの橋、白山島がシンボルの由良海岸に向かう。ところどころに海藻が漂う波静かな入り江に三脚を立て、少し長めのレンズで海と向き合う。

時間の経過と共に、足元の渚にはチャプチャプと、やさしく波音が近づいてくる。空が青と赤に分かれる頃、シャッターを切り始める。

どのくらい経っただろうか。夢中な私は闇の中に、ひとり取り残される。

色彩は太陽からの賜り物。

写真・文＝高橋政知

山形エクセレントデザイン2015地域デザイン賞受賞

日知舎のおえ草履

「おえ」とは
カヤツリグサ科ホタルイ属に属する
「フトイ」という植物の地方名のこと。
この植物を使った草履自体、希少だとか。

集落に自生するおえを夏の土用の前に刈り入れ、天日干しし、雪洞の中で燻し、さらに乾燥させて編んでゆく。湯殿山の小さな山里で齢90を超える一人のおばあちゃんによって、ひっそりと続けられてきたこの手仕事が今、「日知舎（ひじりしゃ）のおえ草履」として新たな歩みを始めている。

始まりは、日知舎主宰の成瀬正憲さんが月山山麓の手仕事の聞き書きをしていた平成24年に、そのおばあちゃんと出会ったことだった。草履の美しさと温かさに感動し、おばあちゃんの姿に心動かされた成瀬さんは、その後、おえ草履の継承に向けて、道を模索し出した。

この動きに共鳴するように現れたのが、平成23年に南相馬市から鶴岡に移住した、井戸川美奈子さんだ。井戸川さんは足繁くおばあちゃんの元に通い、編み手の技を身に付けた。鼻緒に庄内刺し子の花を添える仲間も現れた。お針子集団「艸（そう）絲（し）」を率いる飯塚咲季さんだ。昨年9月に山形市から生まれ故郷の群馬へと拠点を移したが、今は山形市のお母さんたちとともに、東北で古くから織られてきた会津木綿に「米の花刺し」と「柿の花刺し」を施し、「花緒」に仕立てている。

「土地や人との出会いを生み出す商品は、途切れたさまざまな関係性を結びます。良いと思えるモノを自分たちで作り、求めてくれる人に届ける。それが作り手たちの生業を成り立たせて、自然と深く結びついたモノづくり文化の継承につながれば」と成瀬さん。丁寧に編み込まれた滑らかで肌あたりのよいこの草履は、今後、たくさんの人の足を包み、よき縁を結ぶモノになりそうだ。

サイズはL（26〜27㎝）とM（24.5〜25㎝）。花緒の庄内刺し子は米の花刺しと柿の花刺しの2種類で、会津木綿の生地は白・ライトブラウン（柿渋染め）・グレー（鉄媒染）の3種類。販売は日知舎のオンラインストアやイベントにて行っています。現在は外履き用に、皮底を施した商品も開発中。

オンラインストア ● https://hijirisha.stores.jp/
日知舎 ✆090-1833-8508

庄内俳句紀行

薫風の碑を訪う

松間を吹きわたる風に、最上川が悠揚せまらず海に入る。かつて千石船が帆を競いあった酒田港を望む。隣接する山王の森と共に港の栄華を物語る日和山公園を歩いた。

季語

薫風（くんぷう）

夏の季語。緑の香りをたっぷりと含んだ、すがすがしい夏の風。

日和山公園から望む六角灯台と酒田港

山形県に源流を持つ最上川は、酒田で日本海に注ぎこむまで、その流れを県内に貫き通す。かつて庄内米や紅花を積んだ千石船が行きかった酒田は、日本海側随一の港町であり、商業都市であった。その繁栄の跡を残した酒田港を一望できる場所に、日和山公園がある。

暑き日を海に入れたり最上川

―松尾芭蕉

鶴岡から川舟に乗って酒田の港に着いた旅姿の芭蕉が、公園の入り口で出迎えてくれる。芭蕉の「五月雨をあつめて早し最上川」の句を頼りに、多くの文人墨客が後に酒田や最上川を訪れた。

酒田市が市制50周年記念事業の一つとして、全長1・2キロにわたる公園の散歩道に29基の文学碑を建立した。江戸時代から昭和にかけて、酒田を訪れた文人と、酒田にゆかりのある文学者たちの碑（いしぶみ）である。

夕涼み山に茶屋あり松もあり

―正岡子規

初夏の青空を碑面に映し、海を渡る潮風が松林を爽やかに抜ける。日本最古級の木造灯台が、酒田港を今も優しく見守る。かつて、三十六人衆と称する豪商たちが海船を走らせ、早くから京の文化を受け入れた。諸国往還之津といわれた往時は、帆柱が林のように立ったという。

松尾芭蕉像と句碑

やはらかく蝙蝠（こうもり）あげぬ港町

―秋沢猛

きっと昼間は活気にあふれた港町も、一日の仕舞時ともなれば、蝙蝠が飛び交い、やわらかな港の匂いに満ちただろう。碑の文字を指になぞれば、古人の声が聞こえてくるようだ。

碑巡りのやがて過客に蝶の昼

―あべ小萩

句碑は、来遊文人が見た酒田を刻む。先人たちの時（とき）空をしるした碑面は、まるで共に語る人を待っているかのようだ。訪れる人は、自らの感性との響き合いの中で、印象に残る碑を選ぶのであろう。それはきっと、湊酒田を訪う者だけの、記憶の中の残像を見るように。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）

千石船

松林

秋沢猛の句碑